
兵士不純31 40

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士不純31 40

【Zマーク】

Z2837L

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

兵士不純31~40

続

31

話が終わると、お前ら自分のことは富田わんと言えともとの調子にもどつてそういう切り出した。大家さんでもいいわ、お前ら行く場所ないんだる。2階使え。しばらくなら居てもいい。

風呂は風呂屋、飯は飯屋、酒だけはある心配するな。

われわれは留まつた。風呂は大正時代に建てられたという贅沢な銭湯が近くに健在だつた。

帰りに雨が降り店の番頭さんが傘を貸してくれて一人で並んで帰つた。橋を渡る。大きな木造の橋で隙間にはこけが生じていた。蛙やらナメクジやらミミズやらが一緒に橋を渡つた。

山で雨が降り水かさを増そうとしている川の流れを欄干で眺めながら美緒がさて、といった。田上も同じ気持ちだつた。さて。

先手を取られたとうな感じだつた。

さて、銭湯に入りながら一人ともおなじ言葉を念じていたのはおかしかつた。

雨が傘からも橋からも垂れて草や花からも垂れていた。とつあえず富田さんとこにもどろつかと美緒が言つた。

死んでたりしないよね。

田上は言いかけたが口にしなかつた。

家に着き1階では杜氏がテレビを見て酒を飲んでいた。

美緒がただいまといい背中でおつと答えていた。

2階は息子の部屋だつたのだろうか。窓が格子で少し出窓になつており腰掛け外の風を浴びるのに心地よさそつだつた。ここからも川の流れを見ることができた。あの橋も遠くに見える。

お酒もらつてこようか、それとも2人で下で昔話でもしてゐる。私お

酒飲めないし。

そもそも、美緒とも杜氏ともどんな繋がりがあるというのか、田上は思い始めた。

天井を見、畳の床を感じ、ちゃぶ台をだし、布団を敷き雨が降り続けとりあえずぼんやりとした窓の外からの明かりがにじみ出してきて眠りについた。

美緒もそうなのだろう。杜氏もそうなのだろう。そう思いながらまどうんだ。

32

日が差し込んでいた。
晴れだった。

天井の面がよく見えた。隅では蜘蛛が2匹眠っていた。
まだ朝は早いはずだつた。美緒はなく、下におりて小便をすまして様子をうかがつたが杜氏の姿もなかつた。

サンダル履きで外に出た。雨上がりの朝はだれでおそつなのだらうか、誘われる。きっと二人で散歩に出ているのだと思つた。水たまりを巧みによけて土の道を歩く。橋のある通りに出るまでは家の周りは舗装されていない。ざりつざりつという自分の足音と光が調和する。雨の臭いと太陽の朝の臭いが混じつたすがすがしい朝に感じられた。

橋にでると2人がいた。

美緒が買い物袋を下げ杜氏は杖をついて煙草を吹かしていた。
急げ者に逆戻りかつかえんの、杜氏が言つ。
買い物袋の中には卵やら野菜やらが詰まつていた。朝ご飯食べよつと美緒が言つ。

橋の途中で引き返して戻つた。

実はな3度仕事を断つた。それを釈明にいかなればならん。

断るといつのは約束を違えるといつとも含めてだ。

ワシが帰るまでこの家を頼みたい。

朝ご飯を食べ終わると杜氏はそう言い出した。

昨日の今日でなんでそうなるのだろうとほんやりと思つていた。

美緒と杜氏は一人で田上を見つめた。

話しあもうついてしまつたのだろう。寝坊するとそんだけ。

中国のどじですかと言おつとしたがそれはどづでもこことのよつに思えた。

まだ朝の7時半だった。

田上は夢を見ていなかつたが、こじままでがすべて夢ではないかと疑うのだった。

富田さんは今日の夕方にこじを発つ。戻らないだつと思つ。死ににいくんだろうと思う。ここが故郷だつて言つたはずなのに。初はぼんやりしてゐる。なにか感じてゐるよつだけどここに来てから霸氣がない。

私は元気だ。外に出てからとこつもの、あの部屋から出てからとこつもの調子がよい。

近くの知り合いの農家にただで卵と野菜を分けでもらえる。米はある。酒もある。食べていくには困らない。冬までは。問題は冬だ。それまでに私が戻らなかつたらここを出る。そう言つた。

初のことは聞かないがよくわかっているようだつた。あれが息子にあつたのだろうと聞いてきた。息子は生きている。だが帰れない。帰つても、生きていな。

私のつくつた卵焼きがおいしかつたそうだ。

卵がいいからと言つてごまかしたがうれしかつた。

家族のようだった。あつと富田さんもやう思つたに違いない。

35

明日なにするかなんて考えなくていい。朝起きて卵と野菜をもりいに行つて朝ご飯をつくる。お昼は散歩に出て食事をし、帰りにスーパーを巡つて帰つてくる。銭湯に行き夕食を考える。3と7と9のつく日はお酒を飲んでもいい日。

静かで穏やかな日。

初は昔は眠くて眠くてしようがなかつたらしげけどここにきてからはそつはならないといふ。

しかたないから話しをしようとあれこれ話しをする。眠くなるまでのだそうだ。そしていつも寝る。なんだかんだで私より寝付きはいい。

便りはない。

こここの住所、あちらの住所と富田さんにもらつた書き置きが部屋の箱の中にしまいつぱなしで眠つてこむ。向こうについたら連絡するといったきり。

初は河原で魚釣り。

橋の架かっている大きな川の他にその川に流れ込む山間の溪流で釣るのだそうだ。

こここのところは朝私より早く起きて釣りに行く。魚を釣つてきてごちそうだと私にうれしそうに渡す。昼は寝ていて夜にまた起きてくれる。

お酒の日にはだ。

何が眠くならないだといいたいが趣味としては悪くない。

私は散歩と買い物と料理が趣味になつた。

街に出て大きくはない本屋で料理の本を立ち読みする時は時間帯が大事だ。学生の帰りの時間にあわせる。ある程度混雑していないと目立つ。

月が出た。

月がでると初は喜ぶ。

橋に行こうと私を誘い外に出る。

ほろ酔いで、橋から下を上を眺めたりする。そして私の臭いをかいだり一緒に寄り添つて歩く。

36

杜氏の残してくれた酒は最高だと思つ。田上はここにきて生き物を見ていると思った。天井に巣くつ蜘蛛、歩く蟻。雨の日の蛙、みみず、ナメクジ。晴れの日の蝶。

日が差す部屋は心地よい。開いた一升瓶の口に止まる蝶。酔っぱらいはしないだろうか。

自分が山から降りた訳。山に残らなかつた訳。この為だといいたかった。

美緒がやつてくる。朝だ。わかっている。起きている。

生き物を見ている。魚を鳥を虫を見ている。風を感じている。光を見ている。雨を雲を空を見ている。

食事を見る。ゆっくり取る。

そして田上は部屋で窓からさす光を見て夕方まで過ごすのもいいし外へでて自然の中ではやはり生物を見るのもいいと一日の時間を思うのだった。

37

夜、真夜中なのだろう。隣で初が布団を起こした。月の光がまぶしかつたからではない。起きた手にその光がかかつっていた。動かなかつた。私は横になつたままそれを見ていた。手が白く月明かりに照らされていていつもなら思うことを思わなかつた。

美しいとも不思議ともなぜか思わなかつた。来るものが来たのだと

わかつていただのだろうか。

その週に家に手紙が来た。

富田康史から田上初、美緒へだった。

38

無事中国に着きました。私は元気です。目的をもうすぐ果たせそうです。お土産をもつて戻るのを楽しみにしていてください。中国のどこにいったのか聞くべきだつた。いま、よつやくたゞりつ手紙なのだろうか。私はそう思った。
初はなにか別のことを考えているようだつた。
この前の夜、なにか見たのを聞いたかった。久しぶりに夢をみたのだろうと思った。
何の夢、どんな夢。

39

老人を、杜氏かどうかはわからないが老人をあいつが、杜氏の息子が連れていた。

山道を登つていた。ゆっくりと連れだつて。先は崖で道は崖に通じている。息子が先に崖の先に歩みを進める。その後を老人が続く。前を見ていなか續く。息子は宙に浮いている。崖に落ちないで空に上がつてゆく。老人は歩けない。落ちて消えた。

40

味が変わつたのか舌が変わつたのかその日の酒は水のようでしかなかつた。手紙に差出入の住所はなかつた。杜氏が行き先と告げて書き残した中国の住所が家にはあつた。
連絡すべきか迷つていた。ここにきて迷つたのは初めてだつた。

美緒に相談した。

でも、言葉どおりとするべきだと二人の結論だった。
すこし様子をみればまた便りがあるだろう。

一応つて感じで思いだしたように書いたんだろうと。
でも、だが、言いはしたが話しあしたが全然そうじゃなかつた。全
然一人ともそう思つていないので。一人ひとりはそうじやないと思
いつつ、相談すると違う答えをだす。その答えにやはりひとり一人
違うと思いつつも違う答えが正しいと思いこむ。
わかつている。わかつている。

われわれは富田康史になにかあつたとわかつてゐるのだ。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837/>

兵士不純31 40

2011年1月28日08時10分発行